

卷 頭 言

— 眞白く氣高き富士ヶ根 —



黒 田 泰 造*

それは清く尊き研究者技術者の姿である。

抑々國の獨立上大切なものは、鐵、石炭、石油と電氣である。曾ては三大海軍國たり、やがて又東洋の代表たるべき我國に於て何れも甚だ貧弱であるが此内電氣はいち早く進展すると思ふ。年々の恐ろしき水害を水力の貯水池等で防ぐべきで、多數國民は此の水害に関心が深いからである。神は貧しき吾々に

發電用として水を恵まれたのであつて、速に禍を轉じて福（完全に利用せば石炭年5億噸に當る）となすべきだ。之は同時に旱害を救ひ食糧は豊富となり、尙奥深く松花江の様山林は利用され、殖林(水害を防ぐ)、と水運は容易になる。木材とパルプによる産業、電氣化學工業、電氣製鐵(瑞典の如く)等は盛になる筈だ。

本邦の製鐵工業に就ては、劣質にして採掘困難なる石炭、砂鐵、硫化鐵、磁硫化鐵等に依存せねばならぬ苦しき國情として、豊富、良質なる石炭、鐵鑛を手近に有する他國に比しては全く浮べる雲の如く經營が甚だ困難なのであるが、此間、黙々として研究し實行する研究者、技術者に私は謹んで敬意を拂いたい。

私は此頃こう考えて居る。暫く辛抱して讀んで頂きたい。昭和十年頃、一寸親戚になる某陸軍大將で鐵に關係あり常識の持主であつた方が、道ならぬ支那事變につき、下剋上を嘆かれ乍ら「一寸待つてくれ、今年中には戦争はやめますよ」と云われたのであつたが、それが何事ぞ、するする其のまゝ續き、物資は逐年不足して參り、不及乍ら私も不足資源委員會で、いろいろ世話して居つた矢先に昭和 16 年 12 月 8 日、宣戦は布告され愕然と驚いたのである。而して獨逸も同様、下手な無謀な戦争に突入した。やがて我國は敗戦後、國土財産を多く失ひ道德は地に落ち、今日此頃の新聞を見ると各位も同感であらうが誠に不愉快である。

世界各國何れも甚だ不安の状態にあるが特に我國は返して貰いたい人は容易に返して貰えず、歸つて貰いたい人は引取つてくれぬ。又李ラインなど國際的に悲しい状態で獨立など名のみ有様である。そして自分の身を人の手で守つて貰つて居る。

國內では政治家の内輪話をきくと誠に情ない思いがし、經濟界は輸入 21 億弗に對し輸出は 12 億弗であり、保有外貨は減少をたどる。賠償も大問題である。しかも食糧や原料の夥しき輸入を要するので爲替レートは容易に變えられぬ。インフレーション

* 本會評議員

ンになる恐が多分にあり、其の上水害や凶作が來た。(昔なら神罰と云わるゝであらう)有名な會社とて買うもの賣るものに何十日かの手形であつて莫大な借金を持ち、資産状態が不安であり、かの頻々たる不渡手形は以前はあまり聞かなかつた。我が國情として最も必要な船は少くなり、戦前貿易貨物の70%は邦船で運ばれ各國の港々には日の丸の旗が勇しく見られたが今や40%に下り、且つ新しき船は僅に半數となり、會社は金利に苦んで居る。一方保全經濟會などの話も聞く。片や高炭價問題或はストライキ、そして郵税は上り、汽車運賃は上る。朝配達の郵便物は實に11時であつて其の回數も減つた。驛の窓口は多くとも開いて居るものは少くて、そして多くの人を徒に待たせて居る。即ち小數者を除いては少く働いて多く得ようとあせる。かかる事が續けばソ連、中共の如くストライキは勿論出來ぬが多くの人は強制的奴隸的労働に餘議なくされ發言はおろか身の自由も失わるゝであらう。ストライキに就て思い起すのは大正9年2~3月、天下の耳目を衝動させた八幡の大ストライキに二回に亘りコークス工場は暴力に打勝つて瓦斯をとめず作業をした。工員は全員工場にとゞめ働いて貰つた。(此間各自の収入は倍加した)。それには謹嚴、質素、熱心其者で且つ精神的な松島課長と山屋技師が常々身を以て率いられた御功績の賜と常々尊敬し感謝して居るのであつて各位もお考を願いたいと思ふ

西獨逸ではストライキが少く其理由は新歸朝の龜井博士によると(1)ストライキに依つて双方利益がない事を知り(2)祖國愛に燃えて、傍目も振らずに勉強し、着々輸出を増す、(3)従つて生活にさしたる苦痛がないとの事である。國民の考が根本的に異つて居る様で、以前も8時間労働を9時間に延した事も聞いた。

之に反し我國では政治家、公用族、社用族、労働ボス等が人々の非難をあびて居る間にあつて研究者、技術者のみは世の風潮に汚れず、しかも生活費も研究費も充分でないに係らず、黙々として眞面目に又大空に眞白に輝く富士の如くに兀然として技術學問に精進し其研究や技術は着々と、著しく日に日に進めて頂いて居る。嗚呼於是乎國亡びずとの感を深くするのであつて私は實に心より頭の下る思いがする、深く感激する次第である。先日友達が自分で立派に板に刻られた「獨忍自安」の文句が大變よい言葉で身の爲になると思つて特に頂戴し座右に飾つて居るが吾々は今の世相を見て世を憤り、自暴自棄になつてはならない。研究者技術者は「獨忍べば自安し」と考えて居らねばならぬが、さらばと云つて「見ざる、聞かざる、言わざる」と云つて蕨を食べてのみ居るべきではなからうと思ふ。私は「何となるみかわしやしらね共、しぼる此身はいとやせぬ」と此歌が好であつた、

とまれ清く尊き我が研究者技術者に國の將來を托して住み良い大和島根にして貰うべく心靜に此の老兵は見守らせて頂くのである。